

大野特産品のトマトとイチゴです。

大野ヲ耕ス

発行 株式会社 起点



FEATURE

コットン畑とその周辺の 生物多様性調査をはじめました。

INDEX

- 1 コットン畑周辺を昆虫学者と歩いてみたら、見えない世界が見えてきた
- 2 コットン畑周辺で見つけた昆虫たち
- 3 自然との共生を目指してできることを考える
- 4 大野を自転車めぐる
- 5 大野の昔（鉱山編）
- 6 編集後記



玉山地区に綿花畑を構えて4年が経った。畑を貸して下さった地主さんでさえ、初めは「何者か分からない」私たちに、かなり警戒されていたのではないと思返す(笑)。この4年の間に、地域の方が少しずつ声をかけてくださり、綿花栽培の体験訪問も増えてきた。何の縁もなかったこの土地に対して関心を持たれたのは、この細かい糸のような繋がりが何層にもなつて太くなつてきたからだと思う。

「大野ヲ耕ス」は、私たちが地域により一層関わっていくための「手段」のひとつである。今年も駒込地区にある旧大野二小への本拠地移転も決まった。改めて説明すると、私たちはコットン屋だ。綿花を育て、収穫した原料を使って製品にし、それらを販売して生計を立てる。同時に、その作物が育つ地域も健やかで開かれた場所であつてほしい、というのが私個人の願いでもある。人が集い、笑い声响起き、活気が生まれる。そこに私たちが関われるのなら、こんなに嬉しいことはないと思う。

本誌をお手に取っていただき、本当にありがとうございます。地域をめぐりながら、産業の歴史が気になり、地域のルーツを紐解き始めました。次号もどうぞご期待ください。(株式会社 起点 代表 酒井悠太)

最後まで「大野ヲ耕ス」を読んでいた、ありがとうございます。酒井さんに「起点の発信のサポートをしてくれませんか？」と声をかけてもらったときには、まさか新聞が出来あがるとは想像もしていませんでした(笑)。私は生まれも育ちもいわきですが、「大野」という地名を知ったのはコットン畑に足を運ぶようになってから。夏休みの一日のように虫採りをして歩いたり、自転車で巡つてみたり、八雲鉱山跡で昔の営みを想像するうちに、すっかり魅了された。大野のポテンシャルの高さに圧倒されました。地域や自然は先人たちが受け継がれてきたものだと改めて実感しています。

賑やかな時代から時が経ち、今では地区の小中学校は廃校となつてしまいました。自転車で大野を案内してくれた松本さんが「少しづつ閉じていく大野を元気にしたい」とおっしゃつていたので印象に残っています。「大野ヲ耕ス」がその一助になれるかはわかりませんが、土地に刻まれた記憶を耕すようにこれから大野を歩いてみたいと思います。そして、コットンという新たな芽吹きが大野に根付き、次の世代にまでつなげていくことを願っています。次号もぜひお付き合いください。

(フリーライター 奥村サヤ)

大野ヲ耕ス vol.1
2024年2月29日 第1刷発行

企画：「大野ヲ耕ス」製作委員会
テキスト：奥村サヤ
デザイン：高木市之助
イラスト：熊田菜花
写真：金成清次、奥村サヤ
資料協力：須田真一、山崎誠
協力：日本自然保護協会、ラッシュジャパン、颯サイクル、松本恵美子

生態調査地：福島県いわき市四倉町玉山地区内
調査日時と天候：
・6月調査 (2023年6月8日/曇/13:30~16:30)
・8月調査 (2023年8月21日/晴/10:30~17:30)
・10月調査 (2023年10月18日/晴/11:00~16:00)

発行元：株式会社起点
福島県いわき市好間町中好間字川原字17-1
TEL 0246-85-5977 FAX 0246-85-5978

お問い合わせ：info@kiten.organic (起点)

起点のnote  起点のinstagram 

本誌は「令和5年度 福島県地域創生総合支援事業」の助成を受けて発行したものです。

大野ヲ耕ス

ここにあるのは、広大な田んぼと青い空。
皆は何も「ない」と言うけれど、
ぼくたちはたくさん「ある」ことを知っている。
木々のざわめき、小鳥のさえずり、出たちのいとなみ、
その静かな声に耳を澄まし、土地に実りをさずかる。
循環のなかに生きるということ。

「大野ヲ耕ス」は、地域をほぐす情報誌です。
空気を含んだ土壌は、保温性と水捌けが良くなり、
作物が豊かに育ちます。

誰もが生き活きと根っ子を伸ばせる、
そんな地域の未来を願って。



大野の生態調査エリアマップ



Ⅰ コットン畑周辺を昆虫学者と歩いてみたら、 見えない世界が見えてきた



日本各地の「昆虫の住民票」づくりをしている昆虫学者・須田真一先生



春・夏・秋と季節を変えて生物多様性調査を行いました



生き物の命を支え、生物多様性には欠かせない存在の「エノキ」

「生物多様性の調査をするので、一緒に歩
きませんか？」
ある日、「株式会社起点」代表の酒井さん
から声をかけてもらった。起点は、四倉町玉
山地区にある畑でオーガニックコットンを育
て、布製品を作っている会社だ。自然にも生
き物にも誠実なモノづくりをしている姿勢が
好きで、いわきに遊びに来てくれた友人・知
人には必ず起点の手ぬぐいを手渡している。
地元で育ったものをだれかに贈ることができ
るのは、やっぱりうれしいものだ。
さて、そんな推しの会社・酒井さんからの
お誘いなので前めりで行きます！」と答
えた。それにしても、なぜ生物多様性の調査
をするのだろうか？

「ぼくたちは有機栽培で畑を耕しているけ
ど、生き物たちにとって本当にポジティブな
環境になっていくかどうか、実のところわ
かっていなくて、現状を知ることができれば、
これから行動していくべきことも見えてくる
かも」と酒井さん。地球では生き物たちのつ
ながりによって豊かな生態系が保たれてきた
けれど、いま、そのバランスは崩れはじめて
いる。起点の畑からできることをするために、
専門家を交えて調査をするのだというのだ。
いったい、どこまで誠実なモノづくりを目指
すのだろうか……！！
お盆を過ぎてもまだジリジリと日差しが照
りつける夏の日、起点の畑へ向かった。到着
すると、酒井さんはじめ、大人たちが虫採り
網を手持ってここにこしながら待っていて
くれた。なんだか子どもころの夏休みに

戻ったみたいだ。
調査は、日本自然保護協会のみなさんと昆
虫学者の須田真一先生と一緒に、起点の畑と
その周辺をぐるりと歩いた。須田先生は、昆
虫を追いかけて50年という昆虫界の第一人
者。「やっていることは小学生のときと変わ
らないんですよ」と笑うお茶目な人柄だ。そ
んな先生と歩くと、三歩進めば気になる虫や
植物を発見するという具合。20分あれば一周
できる道のりを5時間かけて歩いた。昆虫を
見つけるとすぐに先生が名前や生態を解説し
てくれるので、面白くてつい前のめりで質問
攻めにしてしまう。その場にいた大人たち全
員の目が輝いていた。こうして歩くと、不思
議なことに普段なら見過ごしてしまう世界
が見えてきた。

2 コットン畑周辺で見つけた昆虫たち

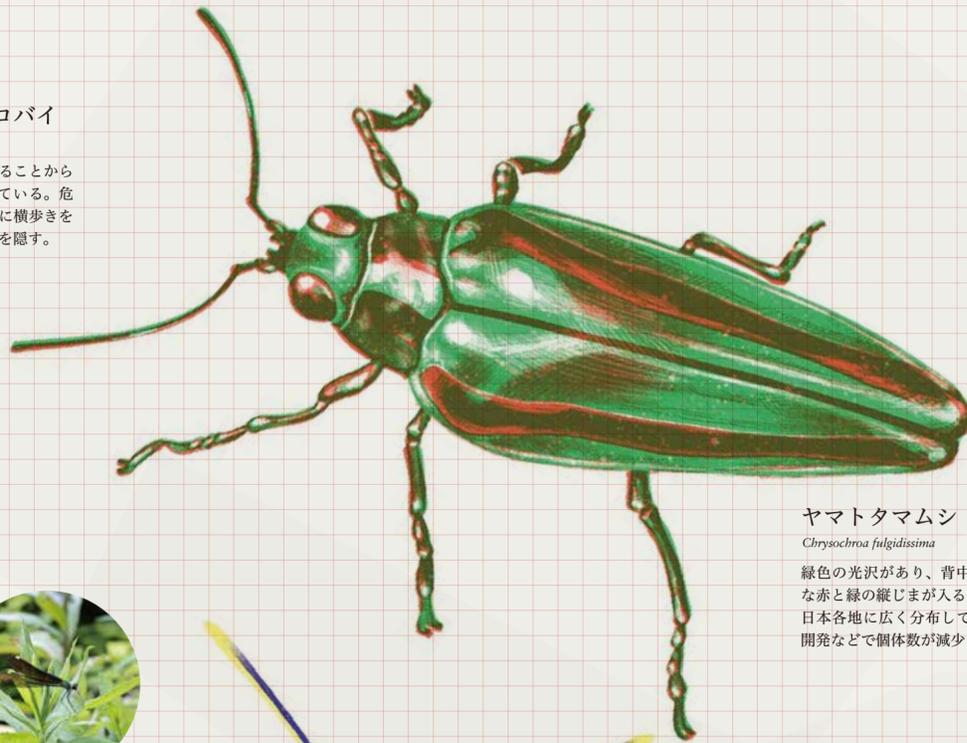
コットン畑の周りには、さまざまな虫が住んでいる。花の蜜を吸ったり、葉っぱの裏でジッとしたり…個性豊かな虫たちの世界をのぞいてみよう



ツマグロオオヨコバイ

Bothrogonia ferruginea

色や形がバナナに似ていることから「バナナ虫」とも呼ばれている。危険を感じるとカニのように横歩きをして、葉の裏側などに身を隠す。



ヤマトタマムシ

Chrysochroa fulgidissima

緑色の光沢があり、背中に虹のような赤と緑の縦じまが入る美しい甲虫。日本各地に広く分布していたが土地開発などで個体数が減少している。



アカスジキンカメムシ (幼虫)

Poecilocoris lewisii

アカスジキンカメムシ幼虫の大集団をシキミの葉裏で発見！須田先生曰く「このまま越冬して大発生したら昆虫雑誌に載るかも」と!? 成虫になると色が光沢のある金緑色に変わり、日本で最も美しいカメムシの一つとされている。



ツマグロキチョウ

Eurema laeta bethesba

福島県は分布北限地域で希少種。食草とする「カワラケツメイ」が河川整備などで減少しているため、ツマグロキチョウも急速にその姿を消しつつある。



オオアオイトトンボ

Lestes temporalis

和紙の原料となるこうぞに産卵することが多く、実害を及ぼすことがないのに人間の勝手にトンボで唯一害虫として指定されてしまった過去を持つ。



ナツアカネとアキアカネ

Sympetrum darwinianum & *Sympetrum frequens*

秋の風物詩「赤トンボ」の代表。胸のまようと微妙な色の違いで見分けることができる。この2種類がいる地域は健全な田んぼが残っている証。



オオムラサキの寿命は約1年。ルート内では成虫の亡骸を発見した。



オオムラサキ

Sasakia charonda charonda

国蝶に指定されている鮮やかなオオムラサキ。現在では生息できる里山環境が少なくなり、準絶滅危惧種に指定されている。



カトリヤンマ

Gynacantha japonica

かつては夕方になると群れで飛び回る姿が見られた。名前のカトリは「蚊捕り」で、蚊を捕って食べることからつけられた。東北地方では希少種。



田んぼの役割を知る

この日、生物多様性調査で見つけた昆虫はざっと100種類ほど！当たり前前のことだけど、自然は多様な生き物の住処なのだと思いがさした。葉っぱでひと休みしているムラサキシジミ、美しく舞うオオムラサキ、水辺でふわふわ飛ぶハグロトンボ。わたしたちはこの小さな生き物の声をちゃんと聞いているだろうか。そんな問いかけを思わず自分に向けてみる。

調査は、春・夏・秋と季節を変えながらおこなう。定点観測をすることでその土地の自然環境が見えてくるのだそう。特に、トンボとチョウは環境の指標となる。たとえば、近年激減している「カトリヤンマ」がいる水田は、除草剤などの農薬を使用していない健全な田んぼの証。起点の畑周辺では、この姿を確認することができた。

田んぼは「生き物のゆりかご」と言われるほど、豊かな生態系があり、多様な生き物が生息している。水を張った田んぼにはタニシやドジョウ、オタマジャクシが住み、春にはカエル、夏にはホタル、秋にはトンボと季節ごとに顔ぶれが変わる。そのサイクルに合わせて生き物たちが繁栄し、人間のいとなみと大きく関わってきた。ところが、近年は農業の使用で豊かな生態系のある田んぼが減少しているそう。

何ができるか考える

そういえば、わたしが子どものころはカトリヤンマは珍しいトンボではなく、家のまわりでもよく見かけた。なんなら、赤トンボ（アキアカネ）もオニヤンマもいた。開発などしていない土地なので実家周辺の景色は変わらないのだけれど、今、トンボの姿を見ることがない。変わらないと思っている景色のなかでも、確実に昆虫たちの環境は住みずらいものになっている。生物多様性の調査がどのようなことにつながっていくのか、今はまだわからない。けれど、すべての生き物にとってよい環境となるために何ができるだろうと考えることは、きっと豊かな循環を生み出すはずだ。

この日から、今まで目に入らなかった虫たちが気になるようになった。お、あれはチャバネセリ、あれはシオカラトンボだな、と覚えてた知識を出してひとりニヤニヤしている。やっぱり、見える世界が少し変わったと思う。



起点の畑に設置された交流スペースは休憩ポイントに



地域を感じられるサイクリングがとにかく楽しい！



映画フラガールのロケ地になった橋も巡りました



松本さんの解説で大野の奥深い歴史が続々と明らか

4 大野を自転車であぐる

コットン畑のある大野地区には、
どんな文化や歴史があるのだろう。
大野をもっと知るために、
自転車であぐることにした。

大野をもっと知りたい。そこで、自転車に乗って大野地区を巡ってみようということになった。ただ自転車であぐらだけだと土地を深く知ることができないので、いわき自転車文化発信・交流拠点「NORERU?」のプロジェクト、「いわき時空散走」のサポーターで大野出身の松本恵美子さんに案内をお願いをした。自転車は四倉町にある「颯サイクル」さんでレンタル。木村匡志店長がアテンドして一緒に走ってくれるという。最高の環境が整った！

年末も差し迫った12月のこの日は、寒さが本気を出してきて、いざ自転車を漕ぎ出すと凍てつく風が頬を刺した。けれど、そんなことはどうでもよくなるくらい美しい四倉海岸が目の前に広がった。大野を目指して山側へ自転車を走らせると、「ここはトロッコの廃線跡です」と松本さん。子どもにはトロッコが四ツ倉駅裏にあるセメント工場まで石灰石を運んでいたのだそう。その後、古墳や滝夜叉姫の伝説の場所も案内していただいた。まるでタイムスリップしたかのように興味深い歴史が紐解かれ、一同大興奮！ そのお話は長くなるのでまた次号をお楽しみに。今後は大野サイクリングツアーを実施する予定もあるとか。大野をあぐるサイクリングツアー、とってもお勧めです！

颯サイクル
いわき市四倉町東4丁目133-9
☎0246(51)4390



5 自然との共生を目指して、 できること

今回、調査に同行して気づいたことがある。子どもたちに親しんでいた虫たちは今、急激に減少していること。里山や田畑は、その土地の自然と人が共存していくために必要な仕組みになっていること。生き物が住みやすい環境を守ることが大切だ。

経済成長とともに、都市にはひとが集まり、地域は高齢化が進むようになった。生産地と消費地が離れたことで、食べ物も衣類も自分たちの地域で作らずとも、安いものが簡単に手に入る。けれど、手軽で便利な恩恵と引きかえに、先人たちが培ってきた持続可能な仕組みをくずし、自然も生き物も追いやってきてしまった。



コットン畑の収穫期。和やかな雰囲気での作業風景

世界は国際目標として、2050年までに『自然と共生する世界』の実現を目指している。いまだ25年後、本当に世界は変わることでできているのだろうか。少し不安にもなるけれど、今からでもできることをはじめればよい。ひとと自然が持続的に共生できる仕組みを模索し、生き物との正しい関わり方を学んでいきたい。

起点の畑やその周辺には、個性豊かな生き物がたくさん生息していた。お互いが心地よく暮らしているように、わたしたちに何ができるか。穏やかな風が流れる起点の畑から、みんなと一緒に考えていくようなことができたらいいなと思った。



起点の畑で有機栽培している和綿「備中茶綿」

5 大野の昔（鉱山編）

その昔、四倉北部にあった八茎鉱山。
そこには、1つの町が存在したという。
大野の昔を紐解くために、
八茎鉱山のあった山奥へ向かった。



新八茎鉱山玉山社宅に遊園地があった痕跡を発見！



八茎鉱山で見つけたレンガの建物跡



銅山神社には石碑だけがひっそりと残されていた



車一台分がやっと通れるくらいの道を突き進む

四倉町北部の山奥に、かつて銅やタングステン鉱石を採掘していた「八茎鉱山」があった。その歴史は古く、1391年には、原始的な手掘りによって採掘されていたという。その後、1906年には八茎鉱山が創業となり、鉱石の採掘が行われてきた。

興味を持った私たちは、八茎鉱山跡へ車で向かった。大野地区から北部へ進み、山の中へ。舗装されていない山道は、運転操作を間違えたら転がり落ちてしまいそうなスリル！ 慎重に進んでいくと、間もなく「千軒平ため池」に出た。この場所には当時、芝居小屋や映画館、小学校があり、鉱山で働く人たちの住宅が千軒あったことから「千軒平」という名前が付けられたのだとか。しかし、景気の変動や二度の大火事がこの地から人々の暮らしを消し去ったと伝えられている。さらに奥へ進むと、何かしらの建物だったレンガの壁が残されていて、当時の面影が浮かび上がってきた。1925年には閉山となった八茎鉱山は磐城セメントに合併され、時代はセメント製造へ移り変わっていった。

にわかに信じがたいけれど、山奥にひとつの町があり暮らしがあったことに驚きを隠せなかった。八茎鉱山についてまだまだ知らないことが隠されていていかなので、今後も調査を続けていきたいと思う。この時代のことを知っている方がいたら、ぜひ大野ヲ耕ス編集部までご連絡ください。